

# モリーの独白における身体表象の書き換え

田中 恵理

## はじめに

ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』は、1922年2月2日、ジョイスの40歳の誕生日にパリで出版された。その実験的な手法と大胆な性表現は出版前にアメリカの前衛的な雑誌『リトル・レビュー』に掲載されていたときから物議を醸しており、1920年、第13挿話を掲載した7・8月号についてはその内容が猥褻だと判決が下され、『リトル・レビュー』は有罪を宣告された。『ユリシーズ』の出版は、パリの個人書店シェイクスピア・アンド・カンパニーの経営者シルビア・ビーチの助力により叶ったことに加え、『リトル・レビュー』の編集者マーガレット・アンダーソンとジェイン・ヒープ、及びジョイスを金銭的に支援していたハリエット・ショーウィーヴァーなど、『ユリシーズ』が女性読者のデリケートな感受性を守るために発禁されながらも、女性たちによって支えられていたのは注目に値する(Birmingham 12)。1933年アメリカでジョン・ウルジー判事によって出された判決——『ユリシーズ』は猥褻な作品でないという判断——を経て、『ユリシーズ』の評価は肯定的なものへと転じていき、現代では『ユリシーズ』における身体や性の表現は問題にはならない。しかし、検閲がかかるのをジョイスはおそらく承知の上で、なぜそういった描写を『ユリシーズ』で行ったのか、出版100年目の今、現代のコンテクストから捉えなおす意義は十分にある。本発表では、モリーの独白において「猥褻」とされた身体的な表現を考察し、その革命性とヒューマニズムを明らかにした。

## 1. 身体経験に対する思考過程の文字化

ジョイスは、フランク・バッジエンにあてた1921年8月16日付の手紙の中で「ペネロペイア」について、女性の身体の4つの部位、つまり胸、臀部、子宮、膣からなっていて、それらが **because, bottom, woman, yes** に対応するよう意図して書かれていると語っている (SL 285)。「ほかのどの挿話よりもおそらく本挿話が猥褻であること」といった言及などからも、ジョイスが『ユリシーズ』最後の挿話においてモリーという女性を語り手として、女性の身体に関する言葉を、それらが猥褻だと認識した上で用いたことが分かる。

モリーの解釈をめぐるのは、出版当初から様々な議論がなされてきた。その批評の多様性は、彼女の独白が多様な側面を持つことの反映と捉えられるが(道木 295)、そうしたモリーの独白にある矛盾は同時にモリーの時代における、ひいては現代にも通じる女性像の反映でもあり、したがってモリーの独白に我々読者が共感するとき、それは、女性をめぐる言説が昔も今も矛盾にあふれていることを示唆している。

モリーの独白の身体性を考察する上で注目すべきは、我々読者が見ている、もしくは読んでいるのは、モリーの身体とその経験の直接的描写ではなく、それらについてモリーが思い出し、考えていることが文字化されたものであるという点である。言い換えると、モリーの独白における身体的・性的な描写は、彼女が経験したり目にしたりしたことを想起しそれらを彼女の視点と身体のリズムに沿って再解釈するという思考の営みが言葉として綴られた創作物となる。したがって、こうしたモリーの思考過程を示した身体の描写は、女性=身体、男性=思考とする伝統的な二項対立的イデオロギーを崩す革命性を秘めているといえる。加えて「ペネロペイア」は、女性の体験を女性の視点、あるいは心の目で捉えなおし、その思考過程を身体其自然なリズムに沿う形で女性の口から語るのを描く点において、女性に対するヒューマニズムにあふれているともいえる。

## 2. 女性の視点による身体経験の再解釈

モリーが不倫相手のボイランとの情事について回想している箇所(第3パラグラフ)においてモリーが自分の身体つまり女性の身体と男性の身体について、彼女の視点から再解釈しているのが読みとれる。モリーは、女性の胸について「美のシンボルだと思われていて美術館にある彫刻のよう」(U18.540-41)と称賛する一方、男性のペニスについては、「大きなふくろが2つあってべつものがぶら下がっている帽子かけみたいに直立してキャベツの葉っぱでかくさなきゃいけない」(U18.542-44)とその卑俗性をあざけり、昔それを見せつけられた嫌な出来事をその後すぐに思い出す。興味深いのは、こうした回想をしながら、次の引用のように出産育児について考えている点である。

this one not so much theres the mark of his teeth still where he tried to bite the nipple I had to scream out arent they fearful trying to hurt you I had a great breast of milk with Milly enough for two what was the reason of that he said I could have got a pound a week as a wet nurse all swelled out the morning . . . hurt me they used to weaning her till he got doctor Brady to give me the belladonna prescription I had to get him to suck them they were so hard (U 18.568-77)

片方の胸に残っているボイルンの歯痕とその痛みは、モリーに娘ミリー出産後の授乳や離乳の際の胸の痛みを連想させるのである。別の箇所においても同様に、モリーは男女の生殖器を自らの視点で再解釈してボイルンとのセックスやエクスタシーについて赤裸々に綴るが、同時に、娘ミリーの時に経験したことやマイナ・ピュアフォイの多産を想起する。男女の身体の部位をモリーの視点から再解釈しそれを思考するとき、それらは、性行為が女性にとって妊娠と出産については多産と強く結びついていることが示唆されているといえる。

「ペネロペイア」における性行為と妊娠・出産との結びつきは、生成批評のアプローチからも指摘される。ルカ・クリスピは、ボイルンとの情事を示した第3パラグラフについて、ジョイスがモリーの肉欲に耽る思い出と母や妻としての思い出とのバランスを執筆段階の早い時期から明白に示していて、草稿の後に書かれた原稿や校正の段階においてでさえそのバランスを保つために単語や文をいくつも追加していると指摘する(276)。

つまり、ジョイスは、「ペネロペイア」執筆の際、性行為といった出来事を女性の身体的経験、つまり妊娠や出産、母親や妻といった事柄に結びつける必要性を強く意識していたことが伺える。モリーが男性と女性の身体を女性の視点から女性の身体との関連で再解釈しそれを思考するとき、その思考過程を記した言葉が示唆するのはファラスを崇拝する男性中心主義的な暴力性と女性の抑圧への批判なのである。

### 3. ポルノグラフィと「ペネロペイア」

性をめぐる男性中心主義の暴力性と女性の抑圧を顕著に描くものとして、ポルノグラフィを挙げることができる。ポルノグラフィという用語が現代のわれわれが使用している意味で使われ始めたのはヴィクトリア朝期とされる。ウォルター・ケンドリックによるとポルノグラフィはギリシア語の *pornographos* から来ていて、本来は「娼婦について書いたもの」を意味していた。*The Oxford English Dictionary* の第一の語義は、「売春婦もしくは売春についての描写、公衆衛生に関してのもの」で1857年の医学事典から引用されている一方、1755年のサミュエル・ジョンソンの *Dictionary* には“pornography”の項目がないことから、1755年から1857年の間に“pornography”が生み出されたと考えられるとケンドリックは主張する(1-2)。さらにケンドリックは、1860年代に行われたポンペイ遺跡の発掘とポルノグラフィという言葉の意味の定義の関係性についても分析を行う。

こうして、ポルノグラフィという言葉が一般に用いられるようになると、ヴィクトリア朝社会特有の性的過敏さやわい本禁止の法律化によって、時代精神に不道德なものは一切排除されるようになっていく。一方で、抑圧された性的欲望は、逆により過激な発散のはけ口を求め、写真技術の発展とともに性暴力と女性蔑視が表現されたポルノグラフィが大量に生み出されることになった。そのような中出版された『ユリシーズ』は、ヴィクトリア朝期の道徳観に反する描写がなされているとして検閲、発禁の対象となった。「ペネロペイア」が描くモリー像については、夫の留守中に不義を犯し、卑猥な言葉を平気で使う姿がヴィクトリア朝時代に称揚された「家庭の天使」たる女性像を崩す点において、到底受け入れられるものではなかった。しかしながら、「ペネロペイア」での身体をめぐる表現は、女性の思考を通して女性の視点から見た男女間の真実を暴いているのであって、それは、ヴィクトリア朝社会の偽善的な道徳とポルノグラフィが描く男性による女性の身体「モノ化」を痛烈に批判しているといえる。

### おわりに

当時の社会通念ではモリーの言葉は卑俗で受け入れ難かったのは想像に難くない。しかし、モリーの独白は、女性の経験や見たことを女性の視点で、女性の身体の流れにそって再解釈しそれを思考として形成しているその過程を綴ったものである。ジョイスが生きた時代、女性の権利や地位の向上、男女同権を求める運動を中心とした第一波フェミニズムがヨーロッパに広がっていた。ジョイスが描く女性の声に当時、共感した女性は少なくはなかったはずである。そして、#Me too 運動をはじめとする第四波フェミニズムを経験している現在の読者も読み方は変わっても得られる共感は当時と遠く離れていないのではないだろうか。モノローグの最後、繰り返される「イエス」という言葉。これは、愛や人生への肯定、孤独に独り言を言うものの方策などとみなされるが、女性の身体を持つこと女性として生きることへの肯定も示しているといえよう。

### 引用文献

- Birmingham, Kevin. *The Most Dangerous Book: The Battle for James Joyce's Ulysses*. Penguin Book, 2014.
- Crispi, Luca. *Joyce's Creative Process and The Construction of Characters in Ulysses: Becoming the Blooms*. Oxford UP, 2015.
- Joyce, James. *Selected Letters of James Joyce*. 1975. Edited by Richard Ellmann, Faber and Faber, 1992.
- . *Ulysses*. 1922. Edited by Hans Walter Gabler et al., Vintage Books, 1986.
- Kendrick, Walter. *The Secret Museum: Pornography in Modern Culture*. U of California P, 1996.
- 道木一弘『物・語りの「ユリシーズ」：ナラトロジカル・アプローチ』、南雲堂、2009年。